

家庭菜園の未来に何があるか 地域で作り、喜びを共有する暮らしへ

家庭菜園を軽く見るなかれ——。
海外を見れば、ロシア国民の八割が家庭菜園を楽しみ、
ジャガイモの国内消費量の六割がそこで作られているという。
東北を歩き続ける結城さんに、食の未来へのヒントを聞いた。

民俗研究家
結城登美雄

●ゆうき・とみお 1945年旧満州生まれ。山形大学卒業。東北大学大学院非常勤講師。さまざまな地域づくりの活動に対し、NHK東北ふるさと賞、芸術選奨芸術振興部門賞を受賞。著書に『地元学からの出発』『東北を歩く』など。

自給率三九パーセント時代に

——東北各地をフィールドワークされ、農業・漁業の振興や地域活性の活動を続けられてきた結城さんに伺います。家庭菜園や市民農園の人氣をどう見ていますか？

「ご存じのように、この国の食料自給率が三九パーセントとなり、農業

者人口・漁業者人口の減少と担い手の高齢化が深刻化している時代です。そのような時代に「趣味の家庭菜園が増えてるんだってね」と、軽く見ている人がいるのかもしれませんが、僕はこれからの社会とこの国の今後にとって重要なテーマが、ここから幾つも広がっていくのだと思っています。

農業、漁業の生産現場を取り巻く

状況が厳しさを増している中で、あって市民農園を持ち上げる言い方をさせてもらえば、これまで都市生活者が購入する「商品」と見ていた野菜が「作れるもの」だと気づいたということ。そして「我が食べ物は我が手で作りたい」と願う人が増えてきたことも、人氣の裾野を広げているのではないのでしょうか。

家庭菜園ブームを表した言葉には、

これまで「定年帰農」というものがありました。

それは高度成長時代に若者として地方から上京し、企業社会の一員として勤め上げてきた世代が年金生活の楽しみとして、マイホームの近くで家庭菜園や市民農園を始めていくような状況を「帰農」だと表現したものです。僕が暮らしている仙台でも、そのような人たちを数多く見きました。

そして現在は、空白の十年、二十年と言われる時代を経て、就労者のおよそ三割が非正規雇用という社会状況です。

そのような時代に、日々生きていくことの基本にある食べ物を「買うもの」として他者に委ねるのでなく、自分の手で作って生きていきたいと願っている若い世代が増えていることも、注目すべきことではないでし

ょうか。

市民農園にやりがいを見つけた人は、五坪から始めたものを、来年は一〇坪にしてみようか、次は土地を借りて、五〇坪、一〇〇坪でやってみようとステップアップしていくんですね。

仕事を持ちながら、こうやって自給生活を実践していく生き方は、今風にいうと「半農半X^{ユツクス}」という言葉になるのでしょうか。

僕は早稲田大学の石山修武さんたちと、若者世帯や高齢者世帯向けなどの一〇戸ほどのパターンにした農園付き住宅のコミュニティプラン^①を作ったりしてきましたが、これからは、家庭菜園が思う存分できる農園付き住宅——あるいは、いま宮城県鳴子の人々と一緒に取り組んでいるのですが、個人と農家が直接契約して農家の経営を支える新しい生産

と消費の形態「CSA」(Community Supported Agriculture)といった、食べ物は自らの手で作り、共に支え合う暮らしが大きな意味を持つ時代がやってくるのではないかと思っています。

ロシア人の八割が耕す菜園

——結城さんと石山さんの農園付き住宅の構想では、ロシアの農園付き住宅を参考にされたそうですが、どういったものでしょうか？

ロシアの「ダーチャ」というものです。ヨーロッパ各国の自給農園には、ドイツのクラインガルテン、イギリスのアロットメント、フランスのジャルディン・ファミリアルといったものがありますが、ダーチャは、「家庭菜園のある郊外の家」のことを指します。

①結城登美雄＋石山修武研究室
「東北地方を想定した自立と相互扶助を旨とする農園計画」
<http://ishiyama.arch.waseda.ac.jp/www/jp/warch/warch002.html>